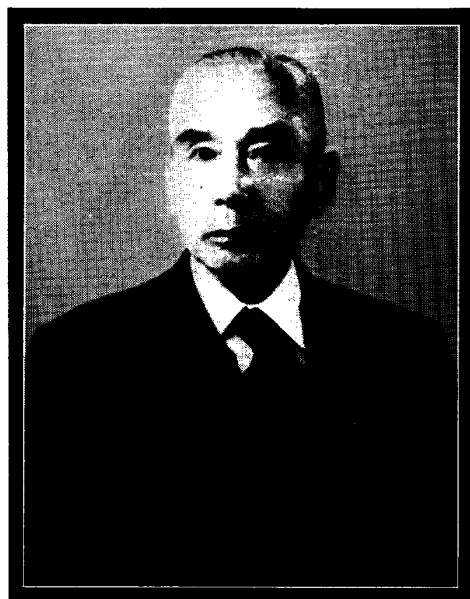




在りし日の堀 正侃先生

堀 正侃先生のご逝去を悼む

本会の名誉会員であられました堀 正侃先生が昭和 54 年 3 月 9 日ご永眠なされました。日本の農薬の育ての親であり、本会の誕生に際してはいろいろとご支援ご指導を賜った先生を失ったことは無限の悲しみであり、ここに謹んで哀悼の意を表す次第であります。

先生は昭和 5 年 3 月東京帝国大学農学部農学科をご卒業後、同学大学院、副手を経て昭和 9 年農林省にご奉職され、農政局農産課において大学で専攻された学問の延長である植物病害関係のお仕事に携わられ、日本の病害防除行政の要としてのお仕事をしてこられました。

第二次大戦の勃発にともない応召されて工兵将校としてご活躍され、復員後再び農産課に戻られて病虫害防除行政を推進してこられました。この間、お忙しい中で学問への情熱を忘れられず研究を続けられて、昭和 36 年には東北大学から農学博士の称号を与えられました。

先生は学究の徒であるとともに行政的才能にもめぐまれた方で、旺盛な企画力と実行力によって次々と新しい病虫害防除行政方針を打ちだされ、今日の病虫害、農薬行政の基礎をつくってこられました。今日、植物防疫という言葉が普遍化してまいりましたが、この言葉こそ先生と一体のようなものであります。

昭和 26 年農政局に新設された植物防疫課の実質的初代課長として病虫害防除行政の推進に耀かしい実績を残してこられました。当時は海外より有機合成新農薬が矢継ぎ早に紹介された時代でありましたが、先生はこれら新農薬を大胆適確に取り入れられ、植物防疫に組み込んでこられたのであります。

植物防疫課長時代の逸話を一つご紹介申し上げますと、課長になられて間もなく、バイエル社からホリドール（パラチオン剤）が持ち込まれましたが、見本のドイツ国内販売品の表示を見られ、適用対象にコーンボラ（アワノメイガ）に有効という記載を見つけられるや「こんな性質の殺虫剤は今までにはない。現在拱手傍観のニカメイガ幼虫に多分有効だろう。ニカメイガ指定試験地の研究者に送って試験をしたまえ」と課員に命じられました。この洞察が見事に適中し、日本国民は空腹をやがて忘れるようになっていくのであります。

今日ニカメイガとともにいもち病、ウンカなど稲作大病虫害が次々に解決しておりますのは、前記

と類似した先生の病虫害や農薬に対する豊富な基礎知識からの卓見と決断、そして全国に実行させられた指導力に負うものであります。

昭和35年農林省農薬検査所の所長の要職に転出され、40年にご退官なされました。その後は社団法人日本植物防疫協会の理事長として、野にあって植物防疫事業の推進を指導されるとともに、後進の育成にご注力してこられました。昭和45年、時代の要請によって生まれた財団法人残留農薬研究所の初代理事長を53年まで兼務されたほか、多くの農業関係団体の役員として後進を指導してこられ、まさに先生の一生は全て植物防疫のお仕事にご終始なさいました。この間、病虫害や農薬に関する数多くの名著も残しておられます。

先生のお二人のご子息のうち、ご長男は共立農機株式会社に、ご次男は科研化学株式会社にご勤務され、ご兩人とも植物防疫にとって鉄砲と弾丸の関係にある農薬散布機器と農薬の研究にご尊父のご意志を継いでご活躍されておられることは深い悲しみのなかに、まことに心強く存じる次第であります。

葬儀は昭和54年3月26日東京青山斎場において植物防疫関係諸団体の合同葬として行なわれ、生前の先生のご仁徳を慕って参列するものが長蛇の列をなした次第です。生前のご功績により正四位勲三等を授与されました。

ご戒名 宝徳院農学正道居士

生先のご冥福を心からお祈り申し上げます。

昭和54年3月

日本農薬学会

会長 宗 像 桂